



宗教倫理の「行為への心理的機動力」について： ヴェーバー・テーゼの歴史的検証(1)

著者	梅津 順一
雑誌名	放送大学研究年報
巻	5
ページ	45-63
発行年	1988-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00007270/

宗教倫理の「行為への心理的起動力」について

——ヴェーバー・テーゼの歴史的検証 (1)——

梅 津 順 一

Weber Thesis and a Puritan Ethic

— A verification of the religious determinants in history —

Jun-ichi UMETSU

ABSTRACT

A central theme of Weber's essay on the Spirit of Capitalism is focused on the religious determinants to the formation of industrial ethos. It argues that religious ideas, particularly Calvinist's predestination doctrine, make the believers unrest and lead them to adopt the ethical posture. This paper attempts to trace the religious sociological formative powers by analysing the practical works of a Puritan pastor; Richard Baxter.

Baxter's ministerial practices; preaching, pastoral care, church discipline, show how he motivates his people to the regenerate life and what the well-ordered ordinary practice is like and how they attain it. Here is illustrated the matter in which religious ideas become effective force in history.

I. はじめに——問題の設定——

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に関するヴェーバー・テーゼについては、歴史的諸事実を根拠とする徹底した批判が提起されていたのであるが、別の機会に見たように、批判の内容は、ヴェーバーの論証の特定の部分について個々の反証を提示したというのではなく、むしろこの問題に関する批判者のわるくいえば予断、よくいえば基本的な理論的前提を根拠とするものであった。すなわち、宗教史的な批判としては、宗教倫理の経済活動に関する敵対的態度と受動性を指摘することにより、ヴェーバーへの反証としたのであるが、そこで提起された事実そのものはヴェーバーの立場からも整合的に位置づけることができたのであり、つまるところ批判者の根拠は、宗教倫理が現世のことがらに積極的に影響することは有りえないという、研究以前の確信に根差していたのである。(12: 64 ページ以下)

ところで、ヴェーバーのこの論文の本論である第2章「禁欲的プロテスタンティズムの職業倫理」、第1節「世俗内的禁欲の宗教的諸基盤」の主題は、ほかでもないヴェーバーと批判者とを分かち、この宗教倫理のいわば社会学的形成力の評価を主題とするものであった。ヴェーバー論文の論理構成からいえば、この第1節において宗教思想が人々の内面を

つかまえ、あらたに行動を方向づけること、言い換えれば禁欲的生活態度の形成が跡づけられ、第2節「禁欲と資本主義精神」において、この題目どうり禁欲と資本主義精神との関連が検討されるのである。ヴェーバー・テーゼの歴史的検証を課題とする本稿は、この前者の局面についてイギリス・ピューリタニズムの指導者リチャード・バクスターの著作を手掛かりに検討することとしたいのであるが、その前に検証すべきヴェーバーの立論そのものについて、簡単に整理しておくことにしよう¹⁾。

ところでヴェーバーが自己の主題が適合すると想定する対象は、プロテスタンティズム一般ではなく、禁欲のプロテスタンティズムと呼ばれる四つの宗教的潮流であり、「1. カルヴィニズムがとくに17世紀のあいだに西ヨーロッパの主要な伝播地方でとった形態、2. 敬虔派、3. メソディズム、4. 再洗礼派運動から発生した諸教派」である。(13: S. 84, 下7ページ) ヴェーバーは神学的、教派的な違いを超えて、そうした潮流の信徒の道德的生活態度にはある共通な性格が刻印されていることに注目し、宗教思想がひとびとの内面を捉えその内側から、新しい生活態度を生み出すに到ること、その過程の検出を試みたわけである。よく知られているように、ヴェーバーはその分析をまずカルヴィニズムの予定の教理から開始している。16, 17世紀の西ヨーロッパにおける政治的文化的闘争の焦点はカルヴィニズムであり、その中心的教理は永遠の昔より救済か滅びかは決定されていると説く、予定の教理であった。しかも、一見極めて抽象的なそうした教理が重大な問題とされた事実のなかに、当時のひとびとの内面的状況をよく窮うことができる、と想定したのである。「そうした〔教理の〕根源的な思想内容を知らずしては、そのような道德が、当時のもっとも内面性ゆたかなひとびとを無条件に捉えていた来世についての思想と、密接に結びついており、この来世の観念の圧倒的な力によらずして、当時生活上の実践に深刻な影響をおよぼした道德的革新は何ひとつとして成就されなかったのだという事実を、とうてい理解することはできない。」というわけである。(13: S. 86; 下9ページ)

ヴェーバーが注目したのは、この宿命論を招来する可能性がある予定の教理の論理的帰結ではなく、それを真剣にうけとった信徒たちの間に広がった心理的帰結であった。「永遠の昔から究めがたき決断によって各人の運命を決定し、宇宙のもっとも微細なものにいたるまですでにその処理を終えたもうた、人間的理解を絶する」神を前にして、「個々人のかつてみない内面的孤立化の感情」が生み出されることとなった。というのは超越的な神の決断を前にして、聖礼典や教会への帰属、あるいは告解といった外面的な保証や人間的な援助は意味を失ったからである。そこで「信徒の一人一人の胸には、私はいったい選ばれているのか、私はどうしたらこの選びの確信がえられるのであろうか、というような疑問がただちに生じてきて、他の一切の利害を忘れさせてしまう」こととなった。とりわけ「平信徒のひろい層にとっては、救われていることを知りうるの意味での『救いの確かさ』が、この上もなく重要なこととされないわけにはいかなかった」。ヴェーバーの宗教倫理の心理的起動力の理解においては、とりわけ注目されるのはこの「救いの確証」の動機であり、それこそが「組織的性格の道德の心理的出発点」となっていった、と想定されるのである。(13: SS. 93, 94, 103, 104, 125; 下23, 26, 43, 44, 90ページ)

自己の救いがすでに予定されているとの教理を前にして、ひとびとは「自分を選ばれたものと思い」「絶え間無く職業労働」に従事することとなった、といわれる。「信仰が救い

の確かさの確実な基礎として役立つためには、それは客観的な働きによって証明されねばならない。」神の栄光に役立つキリスト者の生活が、真の信仰を確実に識別させることになるのであり、「神の栄光を増すものが何であるかは、直接聖書に啓示された、あるいは神の造りたもうた世界の合目的な秩序から間接に認め得られる神の意志によって、知ることが可能である。……自己の行為が、神の栄光を増すために自己のうちに生きる力にもとづくこと、したがって、神の聖意であるとともに、何よりもまず神の聖業であることを意識することにより、この宗教意識のもつ最高の善、つまり恩恵の確信に到達しうるのである。」(13: SS. 109, 110; 下 55, 56 ページ) ヴェーバーによれば、職業労働は社会的秩序の合理的構成に役立つものであり、隣人愛の実践として評価されていたのであるから、職業生活の実践が恩恵の証明に通じるものとなった、というわけである。

ところで、予定の教理が「救済の確証」の動機を刺激し、職業労働を機軸とする生活態度を浸透させていったことは、その「組織的な自己審査」という独自の方法によく示されていると考えられた。カルヴィニズムの信徒たちは、原則のある行き方を追求し、「組織にまで高められた聖潔な生活」の実現をめざし、したがってまた「倫理の実践から無計画性と無組織性がとり除かれて、生活態度全般にわたって一貫した方法が形づくられることとなった。」こうした生活態度は、中世の修道院の内部の生活訓練を世俗生活の内部に移し入れたもの、とみなすこともできたから、これは「世俗内的禁欲」とも呼ばれた。プロテスタンティズムにおいては、禁欲の理想は世俗的職業労働の内部で追求されたからである。

こうしたヴェーバーの立論を検討する上で留意しておかなければならないのは、予定の教理から出発する禁欲的生活態度の発生史的解明が、「理念型」の方法で叙述されている、ということである。すなわち、「考察の方法としては宗教思想を、現実の歴史には稀にしか見ることのできないような、理念型として整合的に構成された姿で提示するよりほかはない。」と断られているからである。そうした考察の方法は、別の箇所では「純粹培養的に考察する」とも表現されている。これはこうも言い換えることもできよう。すなわち、ヴェーバーは現実の無数の変異を伴うカルヴィニズムの禁欲運動の展開を想起しながら、それが発生してくる道筋を、出来るだけ整合的に取り出すことを試みた、あるいはその世俗内的禁欲の発生を、思考によって条件を固定し、ここでの観点から見てもっとも単純された状態を想定し、思考上の実験によって諸要素を反応させて、その発生を検証したものである、と。

このヴェーバーの「理念型的方法」による解明の特徴は、化学反応の実験にたとえて説明することが出来るように思われる。すなわち、ヴェーバーの析出した宗教の行為への実践的起動力は、特定の歴史的事象をそのまま叙述するものではなく、むしろ現実にはほとんどみられないものであったが、このことは実験室内での化学反応がやはり自然界に見られる現実の事象ではない、ということに対応している。純粹な状態における化学的反應の解明が、その反応を含む現実の事象のさまざまな差異を説明できないように、この理念型的解明もさまざまな禁欲的プロテスタンティズムのあいだの差異を説明することはできない。さらに、現実のプロテスタント信徒が行動を決定する際に、宗教以外の経済的ないし社会的利害によって影響を受けたことは十分想定されるのだが、この場合はそうした要因は、宗教的要因を純粹に取り出す実験においては、夾雑物として排除されざらうえない、

というわけである。したがって以下では、そうしたヴェーバーの想定する化学反応それ自体が生じたのかどうかの、追実験をバクスターという素材を用いて行ってみたいのである²⁾。

II. ピュウリタニズムにおける「世俗内的禁欲」の形成 (I)

——予定の教理と職業労働——

II.1. 内面的心理的利害状況——「試みの生活」——

さてヴェーバーは分析のそもそもの前提として、近代初頭の西ヨーロッパのプロテスタンティズムの拡散の背景に、救済への不安が横たわり、ひとびとは宗教的な緊張の内に日々を過ごしたと想定しているのであるから、まずこの点について、バクスターの文献を手掛かりに確認して置くことにしよう。もとより、この点は宗教運動の実際のひろがり、あるいはピュウリタニズムの説教や実践指針などのおびただしい数にのぼる存在などによって、一応確認できることがらである。バクスターの残した数多くの書物は、そうしたひとびとの真剣な関心に対応したものであった。先に述べたように、信仰指導書として良く読まれた実質上の処女作『聖徒の永遠の憩い』(1650) はまさしく永遠の救いを主題とするものであったし、信徒への語りかけには救いか滅びかという、緊迫した心理状況を窮わせるものが少なくない。もっとも読まれた小冊子『末回心者への呼びかけ』(1658) は、邪悪な滅びの状態にあるものへの勧めであったし、『聖徒か野獣か』(1662) といった問いかけは、当時の突き詰めた雰囲気を示唆するものといっていよいであろう。こうした宗教的な関心からいえば、この世における生活は来るべき世において救われるか、滅びるかが決定される「試みの生活」であり、邪悪や誘惑との闘いの日々として意識されたのであった。

ウィリアム・ハラーはピュウリタンが人生を好んで巡礼と戦闘として語ったと指摘しているが(8: pp 149 f.), バニアンの『天路歷程』に典型的に示されている自己の救いを求めての旅、悪魔の誘惑と闘う道行きは、ひろくピュウリタン牧師に共通する表現であった。バクスターの『キリスト教指針』にも救いか滅びかの真剣な問いかけは、滅びの入口としての誘惑への極めて具体的な警戒をとおして知ることができるように思われる。バクスターもまたこの世の生活を、隊長たるキリストの下での戦闘として表現し、「日々巧妙に用心深く、断固として勇敢に闘いつつ過ごす」ことを勧めたが、その仇敵なる「肉欲とこの世と悪魔」の手口、誘惑にはきわめて具体的な注意をあたえていた。特定の罪に導く誘惑としては12の事例、誘惑のわなとしては48の事例、義務から逸脱させる誘惑としては14の事例、義務感を沮喪させる誘惑として20の事例を挙げて、警告を与え解決の指針を添えるのである。たとえばサタンは義務感から解放するために、こんな風に働きかけるといわれる。「誘惑 8, お前は義務は不得手で、全然うまくできないとは思わないか、と」これに対する指針はこうである。「サタンはあなたの成功を妨害し、できるかぎり意気を沮喪させて、あなたが義務は意味がないと考えるように仕向ける……しかし、忍耐と我慢が王冠を勝ち取るのです。始めから成功するのは稀なのです。大工が家を立てるまでには、長い時間がかかりますし、自然は一日で植物や生命を生み出すわけではありません。生きている時間は、働くべき時間なのです」(2: p. 108) こうした仮想のやり取りのなかに、当

時のひとびとの救済への真剣な問いと、不断の努力がしのばれるのである。

II.2. 心理的衝撃——予定の教理の心理的帰結——

さて既に見たように、ヴェーバーはプロテスタンティズムの心理的起動力を、宗教思想とりわけカルヴィニズムの予定説の説明から始めていた。すなわち、カルヴィニズムの予定説は、救済の約束を「隠れたる神」の永遠の決断による「選ばれた人々」に限定するものであったが、こうした救済の限定は一般のひとびとの宗教的な関心、内面的・心理的利益関心を増幅させ、道徳的革新に踏み出させること、いわば方法的生活態度を遂行するエンジンの点火の役割を果たしたというわけである。だが、予定説がそれを信ずるものに対して、救済を獲得するという動機のもとに日常的な実践をうながすという、こうしたヴェーバーの解釈については、しばしば次のような疑問が提出されてきた。すなわち、かりに永遠の昔から救済が予定されているとすれば、信徒にとってこの世における努力は無力とならざるうえないのではあるまいか。とすれば、予定説が実践的な影響力をおよぼしたといった説明は説得力をもたない、というわけである。

実は予定説が宿命論をもたらしという可能性については、ヴェーバー自身承認していたことができる。もっともこれは1905年段階の原論文にはなくて、後の加筆された増補の脚注の一つなのであるが、「論理的には予定説からその帰結として宿命論を引き出すことは可能である。」と述べているからである。ヴェーバーはそうした予定説の論理的帰結に対して、「心理的帰結」というものを想定していた。16, 17世紀のカルヴィニズムにおいては、予定説の「心理的影響は〔救いの確証〕という思想との結びつきによって、それとは逆になった……すでにホールンベークはこうした恩恵による選びと行為との関係を、次のように手際よく説明している。選ばれた者はまさにその選びによって宿命論に到ることはありえない。すなわち、彼はまさしく宿命論的な帰結を拒否することにより、自己が〔選びそのものによって職務に忠実ならしめられた者〕たることをみずから証明するのである、と」。ここで、予定説が「救いの確証」という思想と結びつくというのは、予定説に接した平信徒の関心に対応するものであった。というのは自己が救われているか否かと悩んでいる信徒にとって、予定の教理はその内心の苦悶を深くするものであったが、牧師たちはそうした信徒に対し「誰人も自分を選ばれたものと思い、すべての疑惑を悪魔の誘惑として斥けることを無条件に義務とすることである。」すなわち、信徒たちは「日々の闘いによって自己の選びと義認の主観的確信を獲得する義務」をおうことになった、というわけである。(13: SS. 105, 111; 下 49, 64 ページ) こうした予定説の心理的帰結と論理的帰結との関連に関するヴェーバーの立論は十分妥当するものであろうか。

バクスターは厳密な意味で長老派に属する牧師ということではできないが、予定の教理は維持し、救いに与かることのできるものはわずかな少数者に止まることは、強調してやまないとこであった。すなわち、「神の民は人類の少数部分であり、神はその恵みの栄光のために彼らを永遠に昔からこの憩い〔救い〕へと予定しており、彼らにその子〔キリスト〕を与え、彼によって特別に贖われ、失われた状態から完全に回復し、より高い栄光へと進むようにしておられる。」あるいは「多くのものは召されているが、選ばれるのは僅かである。しかし内面的に有効に召されているものは、すべてが選ばれる」とも記されている。

のである。(5: pp. 56, 57) したがって、バクスターの周辺には、救済の不安を募らせる多くのひとびとがいた一方、他方では予定説を根拠に救済に関する宿命論に陥るものも見られたのであった。「予定に教理の誤った理解」から、「もし神がわれわれを選べば救われ、そうでないなら救われない」と考え、「そのことを根拠に、自分たちの努力を役立たないものとする」と考えるひとびとがいる、と言われるのである。(6: p. 474) そうであるとすれば、バクスターにおいて予定に教理がこの種の論理的帰結をもたらすことに対して有効な歯止めがあったのか、さらにヴェーバーのいう信徒の実践的努力を促進する心理的影響は、どのようにして生じたといえるのであろうか。

バクスターの1653年の著作『良心の平安のための適切な方法』は、そうした「過去の聖徒に見られると同じような証拠が不足しているという理由で、絶えず疑いのなかに生活し、神の怒りを恐れている」(4: p. 846) ひとびとに向けて、救済に関する苦悶を解決し、建設的な方向に歩ませるための実際的な指針集であった。ここでバクスターは、予定の教理を維持しながら、ひとびとを宿命論に駆り立てることなく、日々の実践への動機づけるといふ、巧みな解決を与えているように思われる。バクスターの予定説の解釈上の特徴は、確かに救われるのは「個人の選び」によるのであり、「特殊な恩恵」はその者に限定されるのであるが、救いの源泉としてのキリストの贖罪は、人類すべてにおよぶ「普遍的な恩恵」であるとする点にあった。予定説では「特殊な恩恵」のみが強調されるのに対して、バクスターはこのように「普遍的な恩恵」をも生かす道を探ったのである。彼はこの「普遍的恩恵」を土台とし「特殊恩恵」をその上部構造という比喻で説明しているが、この2つの恩恵をこのように並列させる考え方は、実践的にみて大きな意味をもつものであった。(4: p. 851)

バクスターにおいても救われていること、すなわち恩恵に与かることのできる状態にあることは、聖霊の働きが現れるということから、印をとまなうこと、客観的に知りうると前提されていた。したがってまた、救済の不安にあるのであれば自己の救済を確認することによってそれを解消することができるわけである。このことは、「聖徒にみられたような証拠がない」として、その確信を得られない者達の不安を募らせることにもなったわけだが、誰にもひらかれた「普遍的恩恵」と個人的な「特殊恩恵」との区別は、それがあたえられるとの証拠、確実性も相違するという考え方を伴っていた。すなわち、「普遍的恩恵」があたえるのは救済の「可能性、確率、条件的な確実性」であり、「特殊恩恵」があたえるものは、「絶対的確実性」である。この後者の「特殊な恩恵」すなわち、自己が神に選ばれているとの「絶対的な確実性」は、容易に得られるものではないが、他方キリストの贖罪はすべての人のためであるから、「普遍的恩恵」のもたらす救いの可能性への確信は、多くの人がもつことのできるものであった。こうした立場から、バクスターは自分が絶対的に救われるかはともかくとして、まず救われる可能性があること、それによって得られる慰めを受けることを勧めることとなったわけである。(4: p. 851 f.)

「指針 14, 普通は〔絶対的〕確信を獲得するのは、堅固なキリスト者に限られているのです。」「指針 16, あなたが〔絶対的〕な確信それ自身を期待する以前に、あなたの救済の確率を発見し、それからそれがあなたに与える平安と慰めを受けなさい」(4: pp. 867, 870)

こうした指針は現実には、救済の不安に立ち止まらずに、また絶対的な確信をいたずらに求めることをせず、救いの可能性に信頼しながら、日々の義務、日常生活の実践へと向かわせるものであることは明らかであろう。先の指針には、次のようなさらに実地的な指針が続いて置かれていた。

「指針 22, あなたの時間と関心を、慰めよりは義務に向けなさい。また恩恵の発見よりは、恩恵を活動させ増加させるために用いなさい。確信と慰めのために出来るかぎりのことをすべてなし終えたとき、あなたは確信が現実の服従におおく依存するのであることを発見するでしょう。」

「指針 25, よきことをなす方法をよく学びなさい。そして神があなたに預けたすべてのものを、神がもっとも喜ぶようにいかに使用するかを、日々工夫し、考え、従事しなさい。」(4: pp. 879, 893)

こうした指針に示されるように、救済の不安は救済の確信をもとめて実践へと導き、その実践が確信をもたらす、と想定されているわけである。以上見たように、予定の教理の与える救済の不安と恩恵の確信への衝動は、バクスターにおいて「普遍的恩恵」を土台とすることによって、ひとびとを実践へと導く回路を用意するものであった。ヴェーバーの指摘する「心理的帰結」は、単に偶然ではなく、このような意味で論理的な意味でも準備されていたわけである。

II.3. 実践の課題——神の意志と自然の秩序——

ピューリタニズムの思想は、このように救済の不安にあるひとびとに強烈な衝撃をあたえ、誰にも頼れないという意味で内面的に孤立化させ、救済の確証のために日々の義務に立ち向かわせるものであったが、ではその日々の義務、実践の課題とはどのようなものであったのだろうか。ヴェーバーはカルヴィニズムにおいて取り組まれた実践的生活を、次のように簡潔に説明しているが、その数行で語られる内容は極めて豊富であり、またそれはすくなく逆説的であることに注意する必要がある。

「選ばれたキリスト者にあたえられている使命は、現世において、それぞれの能力の応じ神の戒めを実行することにより神の栄光をますことである。ところで、神がキリスト者に欲したもうものは、彼らの社会的な仕事である。けだし、神は人間生活の社会的構成が彼の戒めにかない、その目的に合致するように編制されていることを欲したもうからである。カルヴィニズムの信徒が現世においておこなう社会的働きは、[in majorem gloriam Dei] (神の栄光を増すため) の働きにほかならぬのである。だから、現世全体の生活のために役立っている職業労働もまた同じ性格をもつことになる。——[隣人愛] は——被造物でなく神の栄光への奉仕でなければならないから——何よりもまず *lex naturae* [自然法] によってあたえられた職業の任務を履行することにうちに現れるのであり、しかもそのさい、それは特有な事物的・非人間的な性格を、つまりわれわれを取り巻く社会的秩序の合理的構成に役立つべきものという性格を帯びるようになる。」(13: S. 100; 下 36 ページ)

ここでは敬虔な信徒の実践は、おおまかに言って二重の規定を与えられているように思われる。すなわち、一つには能力に応じて神の戒めを守ること、神の意志、神の言葉(聖書)に従って生活することであり、もう一つには、社会的仕事、神の創造し支配する合理的秩

序を完成すること、具体的には自然法にかなった職業労働に従事する、ということである。前者は、自己の行動を神意に係わらせること、この世における自然の人間的な関わりのなかに生きるよりも、神、キリスト、聖霊の三位一体の神に対する、人格的な関わり、「求心的で統一的な関係」を重視することを意味するが、それは神の自然の合理的秩序を介して、日常的な義務としては職業労働という課題をあたえられる、というわけである。しかし、ヴェーバー論文ではそうした意味連関があることを示唆するのみで、それを裏付ける史料を十分準備していないように思われる。以下では、この点について立ち入って検討してみることしよう。

一般的にいつて、ユダヤ・キリスト教的伝統において、神への信仰と人への義務との関連を簡潔に定式化するのは「契約思想」であるが、ピューリタニズムの思想的立場がこの契約思想の強調のもとに成り立っていることは、ペリー・ミラーや大木英夫によって指摘されてたところである。たしかに、ウィリアム・パーキンズからウィリアム・エイムズを経てリチャード・バクスターにいたる、ピューリタン・カズイストリイの流れにおいて³⁾、実践神学的な視点から言えばあきらかに、契約的關係が基礎に置かれている。バクスターの『キリスト教指針』は、その意味でもっとも純化され完成された構成をもっているのであるが、「第1部、キリスト教倫理学、すなわち個人の義務、第2部、キリスト教家政論すなわち家庭の義務、第3部、キリスト教教会論、すなわち教会の義務、第4部、キリスト教政治論、すなわちわれわれの支配者および隣人への義務」という全体構成は、それぞれの領域における契約的關係に対応している、ということができる。まず第1に神と個人との契約が基礎におかれた上で、家庭では夫と妻の契約的結合、教会では牧師と会衆と契約的結合、社会では、隣人相互および支配者と人民の契約的結合が取り扱われているわけである。もとより、ここでの関心は神学思想ではなく、そうした思想の社会学的形成力の実態であるから、個々の実践の場面に即して見ていくことにしよう。

バクスターの『キリスト教指針』第1部「個人の義務」は、いま見たように神との契約的な関係に即して諸問題が取り上げられるのであるが、前半の中心的部分である第3章「神と共に歩むための一般的な基本指針」が置かれ、神に対する内面的関係において、実践上の義務が説かれている。神は創造主であり、支配者でありまた、恩恵を与えるものである。したがって人間は、所有者としての神に対しては「自己断念」し、統治者としての神に対しては服従し、恩恵者たる神に対しては、「愛し」「信頼し」「感謝し」、すべてにおいて神の「栄光を増す」ものでなければならないのであった。こうした神に対する内的態度は、神への橋渡し役である仲保者キリストとの関係として、より現実的なイメージで語られていた。「基本指針8から10」では、日々の生活は、「教師としてのキリスト」に学び、「魂の医師としてのキリスト」によって清められ、「隊長としてのキリスト」のもとで闘い、「雇主としてのキリスト」に奉仕する。そうした歩みとして特徴づけられた。すなわち、日常の行動においてキリストを模範とし、また罪深い汚れを癒し、悪魔の誘惑とは勇敢に闘いを続けることが勧められ、また積極的な課題としては、雇人が雇主するように善き業を行わなければならないわけである。(2: pp. 61 f.)

このようにバクスターにおいて信徒の義務は、ヴェーバーの指摘するように、神との人格的な関係における内的従順として語られていたわけだが、ではこれはヴェーバーが他方

で指摘する「社会的仕事」、職業労働とはどのような関係になるのであろうか。この点を、いま述べた「善き業」にかんする部分を手掛かりに見ていくことにしよう。この善き業とは神への奉仕であり、神の意志に服従するものであり、従って神に喜ばれ神の栄光を増すものに他ならない。しかもそれは全員が同じことをやるというのではなく、一人ひとりが「善き業とはなにかということ」を学ばなければならないし、それを生涯問いつづけることを仕事としなければならない。」バクスターによれば、これを考えるヒントは一人ひとりが、自己に与えられている能力と時間とをよく知り、浪費せず、自己の可能性を追求することであった。

「指針 5, 神から受けたすべての能力を熟知し、それをどんな実践に利用すべきかを考えなさい。……このようにあなたが与えられているものを数え上げなさい。その上で、あなたの主人のために用いるには、手元に託されたものはどのようなものに用いるのがよいのかを考え、それを知ることを主要な課題としなさい。」「指針 6, あなたの支出、すくなくとも重要な能力の支出をすべて数え上げ、毎日あるいはしばしばどのような善きことをなしたか、あるいはなそうとしたかを考えなさい。」(2: p. 112)

こうした一般的な指針の後に、具体的な日常生活に即して勧められるのが適切な職業労働の選択なのである。「指針 20, (選択しうる限り) 神に対してもっとも役に立つことのできる仕事すなわち職業を選択しなさい。この世でもっとも富裕になる、あるいは名誉に恵まれるようなものを選択してはなりません」「指針 21, とりわけあなたが神に対してもっとも役に立つことのできる、定着した仕事を離れて生活することのないように注意しなさい。」この職業労働がどのような意味で神に役立つと考えられたかといえ、労働は神に与えられている能力を活動させることにより、共同の利益に資するものと想定されたからであった。「教会とコモンウェルスの構成員であるすべての者は、教会とコモンウェルスの利益のために最大限その能力を用いなければなりません。公共の奉仕は神の最大の奉仕です。これを無視して、私は祈り瞑想しますなどというのは、あなたの雇人が、もっとも重要な仕事を拒否し、それほど重要でない平易な仕事に従事するようなもののなのです。」(2: p. 114) このようにして、ピューリタニズムにおいて職業労働は、人間に精神的肉体的能力をあたえ、相互に利益となるような社会的秩序を定めた神の意志を実現するものとして、評価されているわけである。ヴェーバーの指摘した、一見すると逆説的な神の意志と自然の秩序への服従というキリスト教徒の義務は、以上みたような意味で職業労働として実現することが可能であったわけである。

III. ピューリタニズムにおける「世俗内的禁欲」の形成 (II)

——生活規律の方法——

III.1. 「自己否定」と「自己統御」

以上見たピューリタニズムの実践指針は信徒の心理状況を示唆し、内的動機と新しい内容をもつ行動形成への軌跡を窮わせるものであるが、それだけではなくそうした実践を実現するための方法的努力に対応するものであることを忘れてはならない。ここには、その十全な実現のために障害となるさまざまな問題が取り上げられ、解決のための懇切丁寧な

助言がなされ、また実践を定着させるために現実的な方法が記されているのである。ピューリタニズムの実践的文献は、しばしば誤解されるように生活原則に関する机上の抽象的な原理といったものではなく、生活の手引といったものであった。今日ではこの種の文獻は姿を隠したとも見られるが、現代社会のなかで、たとえば精神科医のすすめる自己分析のための手引、ビジネスマンのための人生論、社会運動の地域のリーダーのためのマニュアル、子育ての実践的指導書といったものがもっている機能を合わせ持つものであった。

すでに見たように、ピューリタニズムにおける実践の課題は、一面では神への従順として、超越的存在に対する人格的關係として語られたが、そうした精神的態度は日々の生活における特有の生活態度という肉体をもつていた。その場合、ピューリタニズムの指導者において、この新しい信仰と生活との課題は、自然の衝動あるがままの状態から訣別し、断固とした決意をもって取り組まれるべき課題として意識されていたことは注目しておかねばならない。バクスターの著作にある『自己否定』(7)あるいは『この世を十字架にかけること』(3)といった主題は、そのことを雄弁に物語るのである。ここでいう「自己否定」とは、「神に背反する利己主義」の否定であり、これは日常生活のあらゆる側面に見出されるものであった。たとえば、嗜好にかかわる感覚的な喜び、歌やおしゃべり、恋物語や遊技の楽しみを、衝動的に追求することは否定されねばならない。あるいは、住居や庭園、服装にまつわる楽しみにも警戒が必要であるし、この世の繁栄の追求や自己の党派の利益の追求すること、さらには自己の学識や人柄に関するものであれ他人の評判を目的としたりすることも、決してそのまま許容されるものではなかった。あらゆる人間の喜びや願望は、神との関係において正され、それに背反することは自己本位の業として否定されたのである。(7: pp. 329 f.)

こうした自然の衝動の否定というピューリタニズムの実践の第一の原則は、その否定のリストのなかに、親子の情愛も含まれている点に良く示されている、ということが出来る。「あなたの子供たちを、神のものというよりもあなたのものとみること、肉欲的な自己本位の考えです。子供たちを神の子というよりも、自分たちの子として、過剰に愛すること、また子供たちの中に神の利益よりも自分たちの利益を見て愛することは、肉欲にしたがって利己的に遇することなのです。」(7: p. 386) 親子の情愛をもっとも神聖なものと評価する態度は、日本の歴史ではしばしば見られることであるが、ピューリタニズムはそれをも警戒し、神との関係に媒介される必要があると見たわけである。自然の衝動の否定はそれほどまでに徹底的であったのであり、こうした点にピューリタンの実践の取り組む課題の大きさが示唆されているわけである。

ところで、この「自己否定」はしばしば誤解されているように、ピューリタニズムにおいては、決して人間の願望や感情の禁圧を意味したわけではなかった。すでに述べたように、人間の精神的肉体的能力は神の与えたものであり、感覚や感情といった能力の充足を衝動的に追求することは問題であったが、そうした能力の発揮をもまったく否定することではなかったのである。そうした観点からいうならば、ピューリタンが目指した「自己否定」は、人間的な諸能力を神の意志に基づいて方向づけることであったのであり、それは「神聖な自己統御」として特徴づけられていたのである。バクスターの『キリスト教指針』第1部「個人の義務」の後半は、統御という共通の章題をもつ次の5つの章が並んでいる。

「第6章、思考の統御」「第7章、感情の統御」「第8章、感覚の統御」「第9章、言葉の統御」「第10章、肉体の統御」。総じてここでは、神との関係という超越的な視点から全ての活動が捉え返されているわけである。

もとよりピューリタニズムの実践の現場から遠い者にとっては、こうした神の意志にもとづく自己統御という指針自体が、きわめて抽象的であり、非現実的な響をもたざろうえない。だが、こうした章題のもとに繰り広げられる膨大な具体的な指針集は、それが日常生活にそくしたきわめて実際の課題として取り組まれたことを示唆している。ここでは「第8章、感覚の統御」を手掛かりにして考えていきたいのであるが、そこではまず第1節に一般的指針がおかれたあと、個々の感覚的欲求にそくして、「眼の統御」「耳の統御」「味覚と食欲の統御」が取り上げられ、次いで「色欲を妨げるための指針」「過度の睡眠をとらないための指針」が続いている。一般的な原則としては、すでに述べたことから明らかに、「この統御の主要な部分は、感覚的益をわれわれの願望の究極的目的としたり、自己目的としたり、あまりに充足したり享受したりせず、あらゆる感覚のすべての活動を魂が導くようにすることである。……眼や耳や味覚や感じ方が、理性によって、神の栄光とわれわれの救いのために、神に奉仕するように教えられてはじめて、それらは良く統御されたということができる。」(2: p. 302) というわけである。この場合の理性とは、神の言葉「聖書」にしたがうことを意味するのであるのだが、ではそれは現実にはどのようなことを意味するのであろうか。

この一例として食欲に関する指針を見てみると、まず大食が肉欲の喜びを追求する罪であると戒められていることが知られる。食べる分量が多すぎたり、食事の回数が多かったり、あるいは費用をかけすぎたり、あるいは好奇心にかきたてられた食事が問題とされるのである。もとより、そこから直ちに一律の規則を持ち出すことはできず、個人差がありまた社会階層による相違も否定されない。しかも食事を楽しむことがすべて悪いというのではないが、より高い目的につながらないものは否定されるのである。大食の罪の原因としてバクスターが想定するものは、「常軌を逸した欲求」「理性の欠如」「富裕なものの自尊心」「あたかも友情の行為であるかのように、他のひとにもっと食べるようにとしきりに勧める習慣」それに「怠惰と職業における勤勉の欠如」である。逆にいえば、衝動的な欲求を節制し、悪しき習慣から離れ、その上で「健康にもっとも役立つのはどの程度かを理解し、食事の量と質および時間の点でそれをあなたの通常の食事の手段としない。」というわけである。(2: p. 315) ここでは衝動に流されない、理性的な新しい生活秩序が想定されており、人間の感覚的な活動もそうした枠組みのなかに位置づけられたわけである。

III.2. 生活の秩序と職業労働

以上見たように、救いの確証を獲得するためのピューリタン信徒の課題の第1は、あらゆる種類の自然の衝動を警戒することであり、積極的に言えば神の意志による精神的肉体的活動の統御が目指されたのであるが、それは現実には理性的な新しい生活習慣として念頭におかれていた。バクスターを始めとするピューリタン指導者たちは、実際の具体的な生活秩序、生活態度を思い浮かべながら、信徒の生活訓練に取り組むことができた、と思

われるのである。こうした事情をよく示すのは、『キリスト教指針』の「個人の義務」が1章をさいて、時間の使い方についての指針を展開している箇所である。人間にさまざまな諸能力を与えた神は、その能力を発揮すべき時をあたえておられる。したがって、「時間を救い出すこと、すなわち改善することは、人間にとって最大限に重要な事柄」として意識されているからである。

ここでいう時間の適切な使い方とは消極的にいえば、怠惰に過ごしたり、惰眠をむさぼったり、あるいは着飾ることに夢中になったり、飲食にうつつをぬかしたり、無駄話に花をさかせたり、さらには空しい書物を耽読しないことであるが、積極的にいえば「絶えず神の統御の下に生きること」を意味した。すなわち、「最大限の注意を払い、熱心を尽くして、絶対的に必要なもっとも重要な業に取り組むこと」また、いくつかの義務がある場合には、「義務の重要性の程度」を学び、それぞれの義務をなすべき時を知ることが大切とされた。「賢明な熟達したキリスト者は、自己の仕事を秩序だて、すべての日常の義務にその時をあたえ、すべての義務を、一連の連鎖の環や、連結し適切に位置づけられている時計の諸部品のような状態にしておきます。」(2: p. 239) ここには、ピューリタン信徒の生活として適切な時間の使い方、生活の秩序が極めて具体的に想定されていることが窺われるのである。

ここでバクスターが想定している生活の秩序を知る上で手がかりとなるのは、『キリスト教指針』第2部「家庭の義務」第17章「通常の週日の過ごし方について」である。「農業者や商工業者は、それぞれの仕事の日常の過程を知ることが、特別の場合を除いてそこから逸脱する必要がないことから、役に立つのですが、それと同様に、われわれの義務の日常の過程と方法を知り、すべてのことがそれぞれ適切な場所に落ち着いているのであれば、われわれが聖潔な生活をいとなむことが容易になるのです。」こうした観点から、1日の生活が簡潔に指針されている。まず健康な人は6時間、不健康なひとでも8時間とされる、健康と労働に適切な睡眠時間を終えて、1日が始まることになる。その1日は、神への想いに始まり神への想いに終わる。すなわち、早朝に個人の祈りや家庭礼拝、あるいは子供や雇い人に聖書を読ませ、また夕べにも家庭礼拝と個人の祈りもち、「日々の行為の反省をおこなう」ものとされた。この宗教的義務と宗教的義務のあいだの日中の仕事は、職業労働への従事にほかならない。「職業労働に労若を忍んでまた勤勉に従事しなさい。」というわけである。その意味では、神の意志による自己統制というピューリタンの課題も、それぞれの職業への専念を中心とする規律ある日常生活という、ごく平凡な事実に基づいているのである。(2: pp. 466 f.)

この職業労働はすでに述べたように、神により与えられた精神的肉体的能力を積極的に働かせ、公共の利益に資するものと評価されていた。したがって、一面では単に生活上の必要から生ずるに過ぎない職業労働への従事自体が、宗教的な意味でも神意にかなった重要な義務であったわけである。しかもそればかりではない。バクスターは職業への従事には「多くの利益がともなう」と示唆するように、神聖な統御、方法的生活態度そのものを維持し、確実にする力があるとみられているのである。すなわち、職業労働への従事は、「肉欲的な色情と願望を抑制し」、「怠惰な考えを寄せつけず」「貴重な時間の損失をまぬがれ」「身体の健康に益し」、総じて「神への従順の生活の経路にいる」ことを可能とするもの

であったのである。その意味で、職業労働は実践的課題にとって、義務の中心部分を占めるというだけではなく、すぐれて戦略的位置を占めていた。宗教的な不安にかられたり、誘惑に陥ったり、あらゆる困難な状況に面したときでも、とにかく職業労働に勤勉に従事することを勧めることができた。これは誰でも手がけることのできる課題であり、それを軌道にのせるかぎり、心身は健全となり、日常生活に秩序が生まれ、おのずから救いを約束されたものにふさわしい生活を作り出すことができたわけである。

III.3. 「救済の確証」と「自己審査」

この『キリスト教指針』が示す実践指針としての方法的性格は、それが「自己審査」という実践の方法で締め括られていることによく示されている。以上見たように、自然の衝動を抑制した自己統御の生活とは、職業労働を中軸とする、冷静で秩序だった一連の合理的生活態度であったわけだが、このことは他面では救いを約束されたものの生活、すなわち「恩恵の身分」が具体的に明確なひとつの行動様式として、眼に見えることになったことを意味した。であるとすれば、予定の教理に衝撃をうけ、救済の不安におびえ自己の救済の確証を獲得しようとするひとびとは、日々の自己の行動を点検し、また「恩恵の身分」に照らして自己の状態を判断することができたのである。さきに見た一日の生活の就寝前の自己反省とは、そうした自己点検を意味し、その反省は自己統御の課題の有効な遂行につながったのである。

ピューリタニズムにおいてこの「自己審査」という実践の方法が浸透した背景には、すでに見たように、救済は確証しようという考え方が前提としてあり、また救済の確証を通じて恩恵の確信に到達するという、実践的努力を支えるひとびとの強烈な動機があった。したがって、『聖徒の永遠の憩い』によれば、もっとも本来的な意味での「自己審査とは、生活の進路の探究、とりわけ魂の内的行為を探究し、神の言葉によって魂の誠実さを試み、それに応じてわれわれの真の状態を判断する」ことであった。(5: p. 156) 聖書に記されている聖徒の事例、あるいはまた生活上の規則を参照しながら、現実の状態とそれが救済にふさわしいものであるかを判断したわけである。「たとえば、1. 私はキリストを信じ、神を愛しているのかどうかを問いかけ、2. もしもそうであると知ったら、次に規則と対象の性質に応じて誠実に実行しているかを、問いかけ、3. もしもそうであると知ったなら、私は再生し聖別されていると結論づける。」というのである。(5: p. 157) こうした自己の内的状態の点検は、1日のおわりにあるいは主日を前にして、習慣的におこなうものとされた。

さて、このように勧められた信徒にとって直ちに次のような問題が生じた。すなわち、先にみたように聖書の聖徒に見るようなはっきりとした印は、自分の状態からは得られないというあの疑問と不安である。これに対するバクスターの実際的な指針は、選ばれているものは少数であるがキリストの贖いは万人のためのものであるから、選ばれる可能性にかけて、選ばれたものにふさわしい実践に努めよ、ということにあった。こうして自己審査は、魂の状態から救済の確認をするというよりも、個々の行動を点検して義務の遂行に努めること、禁欲的生活の浸透、合理的方法的行動様式の実現の手段となっていくのである。『キリスト教指針』の末尾の「自己判断に関する問題と指針集」では、次のような指

針が繰り広げられるのである。

まず、自己の行動の誠実な点検について。「あなたのところと生活に関する観察を持続的な仕事としなさい。決して自己自身に注意を怠ったり、関心をそらすようであってはなりません。」「一方では自己愛、偏見、自信、他方では恐怖によって、試みにおける審査を誤らせ、真実を知ることを妨げさせたりしてはなりません。」「非日常的なことによらず、あなたのところおよび生活の大勢と基調によって審査しなさい。」(2: p. 901 f.)

救いへの問いと行為の点検は、義務の実践へと向かうこと。「あなたの状態を試みることもより、もっと多くの時間をあなたがたの義務を行うことに費やしなさい。救われるために何をしようとか、救われるためことをどうしたら知ることができようとか、そうしたことを問うことに多くを費やすことのないように。この日の義務をよく学び、それに全力を尽くして取り組みなさい。」「もし、なんらかの疑惑を見出したのであれば、それを除去するよう急いで勤勉へと向かいなさい。もし誠実さを見出したのであれば、それを救い主への喜びの感謝へと変えなさい。」(2: p. 903)

恩恵を約束されたものにふさわしい義務の実践は、経験上恩恵の確信をうみだすこと。「恩恵を確認したいときは、いつも恩恵を実践しなさい。……信じかつ改悛していると感じるにいたるまで、信じかつ改悛しなさい。」「論証的な方法で完全な満足に到るまであなたの状態を試みることができない人は、……感情と経験によって得ることができます。というのは、神と人への愛の経験、および神聖な精神と聖潔な生活の経験は、それ自身のうちに感覚的喜びをもっておりそれに従事するものを喜ばせるからです。」(2: pp. 903, 904)

ここでピューリタンが努めた生活態度とは、職業労働を中軸とするあの規則正しい生活であり、自然の衝動を抑制し、神の意志にしたがった自己統御の生活にほかならない。それはどのような意味で感覚的喜びにつながるものであろうか。職業労働が心身の健康をもたらすことは容易に想像できるであろうし、また神の道具として共同の利益に奉仕しているという実感は、確かに良心の平安をも与えたであろう。しかもそればかりではない。バクスターは職業労働はこの地上で神の祝福うけることができると指摘しているが、勤勉な労働は大抵の場合には正当な収益という贈り物をもたらしたのである。たしかに、この健康と平安と富とはこの地上における清らかな喜びをもたらしたのであろうし、しかもそれは「恩恵の身分」永遠の憩いにも通じる喜びとなったであろう。ともあれ、この「自己審査」というピューリタニズムの実践の方法には、宗教倫理の行為への心理的起動力の現実がよく現れているということができるのである。

IV. 「世俗内的禁欲」の日常的定着——禁欲から市民的エートスへ——

以上、バクスターの『キリスト教指針』を通して、ヴェーバーが指摘する宗教の実践的作用を、2つの側面から検討してみた。バクスターの著作から窺われる限りでは、たしかに、予定の教理がそれを真剣に受け留めた人々に与えた心理的帰結は実践による恩恵の確証にあり、その「恩恵の身分」を証するものは、職業労働によって公共の利益に寄与することであった。また、『キリスト教指針』はそれ自体そうした実践活動を有効に方法的に

実現する、指導書という意味をもっていたのである。自己否定によって自然の衝動を規制し、神与の能力を統御することが、不断の自己審査をとおして訓練されていたことも確認することができたわけである。ところで、この『キリスト教指針』はそうしたいわばピューリタニズムの世俗内的禁欲の努力が、ひとつの日常的な生活習慣として定着しつつあることをも示唆しているように思われる。予定の神を前にして、孤独な不安のなかに手がけられた、ピューリタンたちの実践は、次第に確固とした安定した日常生活の過程として姿を現しつつあったように見られるのである。そもそも先に示唆したように、その種の実践文献が大量に発行され、またその集大成としてこうした大部の『キリスト教指針』が著され、日常生活全般に対して具体的な解決を示唆することができたこと自体が、ピューリタン信徒の実践が一つの大きな潮流として、はっきりとした形を取りつつあったことに対応するものように思われるのである。本節では、この『キリスト教指針』をこうした角度から、すなわちそこから世俗内的禁欲の社会的潮流を析出するという角度から検討を加えることとしたい。

そうした角度から見て注目されるのは、バクスターが指針を与える際に、すでにそうした生活規律を身につけたひとびとの存在を前提としているということである。というのは、しばしば信仰の覚醒による生活の方向転換は、悪い仲間を避け、敬虔なひとびとの監視のもとに生活すること、として勧められているからである。たとえば、飲んだくれを克服するための指針では、「神に頼らずいて、誘惑から守るように祈ること」あるいは「毎朝でかけるときにならず眼に止まるベッドとかドアに、ふさわしい聖書の箇所を書き留めておくこと」といった、自分自身の努力が勧められたのち、誘惑の場所と仲間から遠ざかることが付加される。それは徹底的でなければならず、「悪い仲間の家までいって平易にかつ真剣に自分はかつての行いを後悔し、思い出すのも恥ずかしいと思っていることを、告げること」が必要である。またこれとは逆に、どうしても自分で解決がつかない場合は、他者の助けを得ることが有効とされた。「妻なり友人なりに頼んで、居酒屋にでかけたり、健康に必要以上に飲んだりしないように、監視をたのむことや、そうした人に財布を預けること」が勧められたのである。こうした中に、個人の深刻な内省から出発した世俗内的禁欲が、人間関係の力を借りて浸透していきつつあることが示唆されるのである。とりわけ、色欲にかられた時などには「指針 9、有能な敬虔な友人に打ち明け、自分を監視してくれるように頼みなさい。……そうすれば罪を恥じることになります。秘密を打ち明ければ、機会を失うことになります。」「指針 10、そうしたことも役立たないのであれば、多くのひとに告げなさい。癒されないよりは、町中のひとにいったほうがよい。そうすれば、公共の恥がずっと効果が上がることになるでしょう。牧師に告白し、会衆の祈りに自分の許しと再生を祈ってくれるよう頼みなさい。」(2: pp. 328, 329) こうした光景はむしろ罪深い生活が少数派に転落しつつあることを教えるものといえよう。

この飲酒にしろ色欲にしろ、そうした罪の根は怠惰な習慣と結合していると想定されていた。「義務の実際的な無視」と定義される怠惰は、神の与えた精神的肉体的能力を破壊するものであり、単一の罪というのではなく「罪を犯しつつける過程」であった。怠惰は憎むべき多くの罪の母であり、色欲や酔っぱらいのほかにも、虚栄やムダ話や暴動などの罪の誘因となると考えられたのである。この怠惰に対立するものが職業労働に他ならない。

怠惰な者は「指針 3, あなたを日常の秩序ある仕事に従事させる, 合法的な職業に定着」しなければならないのであり, そうした勧めはあらゆる誘惑にさらされたていつとひととに有効であった. その意味では, バクスターがとくに怠惰に注意しなければならないひととひととして, 体質的な原因を除けば, 「富裕で誇りあるひとと」と「乞食」をあげていることは注目される. このひととは職業労働の習慣に疎縁であるというわけであるが, これに対して両者の中間にある中産層は職業に従事し「賢明で謙遜で勤勉」であるといわれるわけである. (2: p. 381)

このように見ると, ピュウリタニズムの世俗内的禁欲, その自己審査によって定着が図られた方法的生活態度は, 職業労働を機軸とする習慣として具体的な姿をあらわしてきたように思われる. この職業労働を機軸とする生活の秩序, 生活のリズムが宗教的に是認されていることを知るのである. バクスターの『キリスト教指針』からは, 救済の不安に発する内面的緊張も窮うことが出来たのであるが, 他方では職業的基盤を確立した人々の穏やかな市民生活を引き出すことも可能なのである. そこでは職業労働に対立する怠惰は厳しく排斥されてはいるものの, 職業労働に適合的な楽しみは積極的に肯定されているのである. 「遊技の書」への反発などからピュウリタニズムは, その種の楽しみを全面的に排斥したと想像されがちであるが, 実はそうではなく合法的遊技, リクリエーションを奨励していることも事実なのである.

バクスターが挙げる遊技やリクリエーションが合法的であるための条件は, 「心身を神の日常の義務に適合する」ものといわれるが, その実際的な内容は職業義務に障害とならず, むしろそれを促進するようなものを意味した. したがって合法的でないリクリエーションとは, 次のようなものであった. それは「職業労働以上に好まれるもの」「神聖な事柄をからかうもの」「貧しい農夫の穀物や生垣に踏み込む狩猟などの, ……他人に害を及ぼすもの」「喜劇役者がよくやるように, 人間の罪を楽しむもの」「色欲や闘争など, 罪を誘発するようなもの」「他人を打ちまかし金を巻きあげる, 貪欲の実践となるもの」あるいは「決闘や闘争の見物などの残酷なリクリエーション」「金をかけすぎるもの」などである. とりわけ, よくみられる問題のリクリエーションとして, 観劇, 勝負ごと, トランプ遊びやサイコロなどであった. これらは人を夢中にさせ, 職業を忘れさせ, 時間を浪費させるからであり, 劇の場合は「瀆神的であり……乱暴やばかばかしい情事に満ちていたし, 勝負ごとは「貪欲をまし, ……ムダ話の機会になり……喧嘩を招く」のである. (2: pp. 386 f)

ではどのようなリクリエーションが適当であるのか. 「学生とか仕事がないジェントルマンであれば, 散歩, 乗馬, 射撃とかの, 楽しさと利益が結合している身体をつかう正直なものが, 適切なのではないでしょうか. 労働を仕事とする人で精神の楽しみだけが必要であれば, ……聖書や瞑想や良書に喜びを見つけるべきではないですか. あなたが精神と肉体の休息が必要ならば, 歴史とか地理の本を読むのはどうでしょう. 植物や草花, 木々を育てたり, 動物, 鳥などを飼ってみてはどうですか. 野原や庭園, 沼沢地や森など, 散歩できる場所は無いのですか. あるいは, あなたのまわりには, 妻や子供, 友人や雇人など, 共に楽しむことのできる人はいないのですか. 善良で賢明でかつ気持ちのよい人と, 面白くてためになることを話すことはできないのでしょうか.」(2: p. 388) こうしたパ

クスターの指針からは、ピューリタニズムの世俗内的禁欲は陰鬱でリゴリスティックな生活だというイメージからはまったく遠い、いわば明るいゆとりのある市民生活のマナーという意味合いを帯びていたことが窺えるわけである。

このようにいわば禁欲のエートスが明るくゆとりある市民生活のマナーという姿をとり、社会生活の内部に定着するようになるとき、ピューリタンの重荷も次第に負いやすいものとなっていったように思われる。いまや聖書に記された人物を手掛かりに、自己の行為の審査を厳格に行うというよりも、もとよりその重要さは否定されるわけではないが、敬虔で賢明な隣人に従うことにより、救済への道を歩むことが可能となったのである。「こころあたたかい真面目なキリスト者の間で生活しなさい。……ある人の情熱には、あたかも火が火を呼ぶように、他者の情熱をもえたぎらす非常に強力な力があります。真面目でこころあたたかい勤勉なキリスト者は、私たちを真剣にかつ勤勉にするための最高の助け手なのです。足はやな旅人と旅行する者は、よろこんでその人と歩調を合わせるようになるでしょう。」(2: p. 388) ここには方法的生活態度を習得することは、隣人とともに生きることのできるかなりの部分を達成しうることが想定されているといえるであろう。

しかも、自然の衝動を監視し、自己否定から出発し、神の視点から生活全般を統御すると特徴づけられた、ピューリタンの「世俗内的禁欲」は、職業労働として次第に日常生活の内部に定着するとき、ひとつのゆとりと楽しみをもふくむ行動様式として意識されたようにおもわれる。職業生活は単に汗と苦勞で彩られた生活ではなく、余暇には読書や散歩を楽しみ、庭いじりや動物の飼育に時を過ごし、また身近なものとの会話に慰めをも伴った日々であった。来世における祝福を確認するための職業労働は、いまやこの地上の生活においても、平安と健康と富という確かな祝福をもたらしつつあった。こうして「世俗内的禁欲」は、とくに断固とした決意や不断の緊張を必要とせず、それ自体が内的充実感をもたう日常の過程として感じられることにもなったのである。「あたかも、音楽家の手慣れた手が、なにか別のことを考えながらも、リュートの曲を奏でることができるように、確固としたキリスト者は、飲食や着衣また職業における労働のような手慣れたことを、その目的を明確に想起したり、はっきりと意図したりすることなく、決心した善き目的のために、忠実に遂行することができるのです。」(2: p. 224) こうした音楽家の比喻は、その社会でかなでられつつある市民のエートスのハーモニーを示唆するものと言えよう。

V. おわりに

以上見たように、本稿ではヴェーバー・テーゼの第1の局面である、宗教倫理の行為への心理的起動力を、ピューリタニズムの文献を用いて検証してみた。ヴェーバーは、救済の不安にかられたひとびと、いわば内的・心理的利害状況に目覚めたひとびとは、とりわけ予定の教理の衝撃のもとに、「救済の確証」のために組織的な方法的生活態度の修得に従事すること、すなわち神の道具として神と人とに仕える、職業労働を中軸とする規律ある生活、言い換えれば世俗内的禁欲を浸透させようとした、と想定していた。ここでは、ピューリタニズムの指導者リチャード・バクスターの著作を通して検証を試みたわけである。

そこで明らかにされたことはまず第1に、バクスターは予定の教理を受け入れつつ、「普

遍的恩恵」と「特殊恩恵」とを巧みに結合させ、予定の教理が宿命論に導くのを回避し、神に従順な生活の実行、人間の義務の実践へと専心することを勧めたことである。その際神の意志に従順な生活として想定されたのは、神に与えられた心身の能力と時間とを用いて、神と隣人へと善き業をなすことであり、具体的には定着した職業労働に従事することとされた。第2に、バクスターの『キリスト教指針』をはじめとする実践指針は、そうした義務の実行のための方法的な手引であることが明らかとされた。職業生活は義務の内容でありつつ、禁欲的な生活態度を有効に実現する戦略的な位置を占めるものと評価されていたのである。しかも、日々の習慣として強調された「自己審査」は、日々の行為を点検し、規律ある行動様式を鍛えあげ、見ゆる聖徒として「救済の確証」を現実的にもたらすものとされたのであった。第3に、『キリスト教指針』はそれ自体が禁欲的運動の所産であることを意味するものであった。実際の指針は信仰的な中堅層の存在を前提とし、また職業義務の生活は一面では合法的なリクリエーションを評価する明るい市民的エートスとして定着しつつあることを示唆していたのである。バクスターの生涯と活動自体が、民衆の怠惰と享楽を容認する宗教的なヒエラルヒーの秩序と闘いつつ、禁欲運動を定着させる試みであったのである。

もとより、ここでの検証の素材はほぼバクスターの著作に限定されているのであるから、ヴェーバーが想定する禁欲的プロテスタンティズムという広範な対象の極めて僅かなものによる検証というべきかも知れない。しかし、繰り返し述べたように、ここでバクスターを使用したのは、近代イギリスの禁欲運動であるピュウリタニズムの典型的な指導者としての評価を前提としてであった。しかも、ここで狙いとしては、条件を固定化し思考実験として、宗教倫理の心理的起動力の作用言い換えれば世俗内的禁欲の発生を、その純粹状態で検証するには、そうした史料の限定がむしろ積極的な意味をもつのである。多くの著者の膨大な著作のなかからは、さまざまな要素を抜き出すことが可能であるが、当該史料の全般的な位置とその内的構成を踏まえることは、ここでの「理念型的方法」による検証にとっては必要なことであったのである。この「理念型的方法」による検証は、さまざまなピュウリタニズムの指導者の差異を問題にしないし、ピュウリタニズムの運動がもつ文化的政治的側面を説明することはできない。しかし、この禁欲運動の内部に潜む、信徒たちの心理と行動の様式の発生史的過程の、ある基本的な部分の理解に寄与することを狙ったものである。

注

- 1) ヴェーバー・テーゼに関する研究史上の受け取りかたは、ヴェーバー自身の主張がどのようなものであるか、という以前に、自己の立脚する思想的ないし方法的な立場におうじた評価の表出である場合が多かったように思われる。したがって、ヴェーバーのこの論文の論理構造はどのようなものであるか、という基本的な部分が必ずしも共有されていない。最近のポッジの著作(8)や、安藤の論文(1)は、そうした研究史上の欠落を埋める試みといえよう。
- 2) イギリス国教会内部の改革運動として出発したピュウリタニズムは、イギリス革命における議会議派の思想的支柱ともなったことから、宗教的性格にとどまらず、社会的政治的次元にわたってさまざまな角度から研究されている。通常ピュウリタニズムを代表する人物としては、クロムウェルらの政治的指導者、バニヤンの文学者の名前が浮かぶが、民衆の社会運動としてのピュウリタニズムを理解するには、いわば草の根の指導者が注目されるのであり、バクスター

はそうした局面での傑出した人物として名の知られた存在であった。

- 3) カズイストリイは通常決疑論と訳されるものであるが、この多くの牧師がさまざまな場面、さまざまな問題にそくした信徒の質問と応答により成り立っている。したがって当時の牧師がどのような問題に直面しどのように解決をあたえたのか、その実践の方向とそのための方法的な努力が窺われるわけである。梅津(10)を参照。

引用文献

- 1) 安藤英治『『倫理』論文第二章におけるウェーバーの問題意識について』『成蹊大学経済学部論集』15-2 (1985)。
- 2) Baxter, R. *A Christian Directory* (1673), in *The Practical Works of R. Baxter*, Vol. 1. (1871).
- 3) , *The Crucifying the World by the Cross of Christ* (1658), in *The Works of R. Baxter*, Vol. III. (1691).
- 4) , *The Right Method for a Settled Peace of Conscience* (1653), in *ibid.*
- 5) , *The Saints Everlasting Rest* (1650), in *ibid.*
- 6) , *A Saints or a Brute* (1662), in *ibid.*
- 7) , *A Treatise of Self-Denyall* (1660), in *ibid.*
- 8) Haller, W. *The Rise of Puritanism* (1938).
- 9) 今関恒夫, 「17世紀イングランドにおける Puritanism と社会—Richard Baxter 研究序説—」『三田学会雑誌』76-5, 1983.
- 10) Poggi, G. *Calvinism and the Capitalist Spirit* (1983).
- 11) 梅津順一, 「ピューリタン実践指針の経済史的性格」『社会経済史学』43-3 (1977).
- 12) , 「ヴェーバー・テーゼの歴史的批判とその理論的前提」『放送大学研究年報』2号 (1985).
- 13) Weber, M., “Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus” in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie* Bd. 1. (1920). 梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上・下 (1955, 1962).

(昭和62年12月25日受理)